

[別紙 2]

論文審査の結果の要旨

申請者氏名 中嶋真美

本論文は、タンザニアのコミュニティ・ツーリズム(CBT)を対象とし、開発・観光・生活の視点から CBT を通じた観光開発の「担い手」のあり方を再検討することを目的としたものである。

序章では、CBT が住民参加を基盤とし、地域の内発的発展を促す独自性をもつ観光形態であり、開発手法として有効と見なされつつも、その社会・文化的影響が懸念されており、実態把握の必要性が今後さらに高まることを指摘し、上述の研究課題と方法を提示した。

第Ⅰ部は理論編である。まず1章では、観光の歴史や形態を整理し、観光と開発のかかわりを理解したうえで、国際観光における CBT が途上国の農山村地域で住民を主体として地域発展を目指す新たな観光形態であることが明らかにされた。2章は本論文の分析枠組みの提示である。従来の観光発展モデルの限界を踏まえ、CBT の発展プロセスを導入期・実行期・展開期に分類した。そして、それぞれの時期の分析視角として異文化普及理論・住民参加型開発論・内発的発展論を援用し、さらに各段階に補完的な役割を担うものとしてソーシャルキャピタル(SC)論を用いるという概念枠組みを提示した。また、観光の担い手の分析には「観光のまなざし」論および「ホスト・ゲスト」論を用いることとした。

第Ⅱ部は実態編である。3章では、タンザニアの CBT には主に開発支援導入型、独立事業型の2つの事業形態が存在することを指摘したうえで、オランダの NGO 支援によるギレン地区(開発支援導入型)を中心事例とし、補完事例として3事例を取り上げて実態分析を行った。そして、4章では CBT 導入期の住民の意識変化及び実行期の住民の発展観の変化について分析した。導入期においては普及促進の鍵となる地域社会内のチェンジ・エージェントの人材育成を徹底する必要があることが示された。また、実行期においては住民の信頼感の醸成により CBT を契機とする発展への期待感が向上しており、特に長期的なインセンティブとして機能する地域公共財の確保を重視していることを明らかにした。

第Ⅲ部は提言編である。5章では、主要アクターである住民と観光客に着目して担い手の再考を試みた。まず、住民は観光資源としても機能することからその存在自体が CBT に不可欠な役割を担っていることを示した。そして、CBT は観光客が開発行為にかかわりを持つ契機となっていることから、CBT を円滑に実施・展開するためには観光客を含んだ形の橋渡し型 SC を形成することが重要であることを指摘した。

終章では、観光・開発・生活の視点から、CBT の地域社会の自立への影響を検証し、CBT の有効性について次のように論じた。(1) CBT の持続可能性を担保するためには、従来欠落していた観光客・開発支援者間のまなざしにも着目する必要がある。(2) 今後の CBT 発展のためには、かかわる者の責任と可能性を利用し、住民が自立し、SC を礎に観光或いは他の産業の可能性を模索し、新たな社会システムを構築することが肝要である。(3) CBT は住民の望む発展を具現化でき、他の支援や発展のエントリー・ポイントとして機能し得る。もちろん、即時効果を有するも

のではないが、住民自身が外部手法を内在化しながら自らのペースで自らが進む方向を選択することができるという点で、新しい発展の仕方であると言える。(4)したがって、CBT は地域開発において有効に機能しうるものであり、そのためには発展段階に応じたアクターの適切な活用と相互のまなざしへの配慮が重要である。

以上のように、本論文は開発支援者・観光客・地域住民という異なるアクターに着目したという方法論上の独創性を有するとともに、CBT 普及展開モデルの提示により持続可能な観光開発へ向けて提言を行っている点で、学術上および政策上の貢献が大きい。よって審査委員一同は、本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。